

## 我が恩師

名誉教授 望月 義夫

はじめに：

私は大正14年(1925)生まれで、今年83歳を迎える。これまで多くの方々から指導を受け、お世話になり、支えられてきたが、そのうち岡山医科大学卒業後特に学問上ご指導を頂いた3名の恩師のお陰で、今日を迎えられたと深く感謝している。

緒方益雄先生：

まずお一人は、私を衛生学に導いてくださった岡山医科大学衛生学教授の故緒方益雄先生である。緒方先生は旧東京帝国大学ご卒業後、同大学法医学教室で血清学の研究に従事された後、大正11年新設された岡山医科大学の初代衛生学教授として大正14年に就任された。後にベルリン大学に留学され、照明、換気、騒音など環境衛生についても、研究を進められた。なお緒方益雄先生は、わが国の衛生学の創始者で東京帝国大学衛生学教室の初代教授緒方正規先生のご子息ある。

私が岡山医科大学に入学して間もなくの昭和20年6月、岡山空襲で下宿を焼け出された後、大学の計らいで、焼け出された他の学生と共に大学構内の看護婦宿舎に入居した。その後暫くして看護婦宿舎の利用ができなくなり、下宿も無く困っていたところ、同級生の緒方正名君(後に岡山大学公衆衛生学教授、同医学部長、川崎医療福祉大学教授)が親切に自宅に来ないかと誘ってくれ、厚かましくもお世話になった。うかつにも緒方君の父上が衛生学の教授であることを当初は知らなかったが、これが恩師緒方益雄先生との出会いである。昭和24年大学卒業後、岡山医科大学附属病院で1年間のインターンをしながら、衛生学教室にも出入りを許され、昭和25年から衛生学教室の助手として正式に先生

のご指導を受けることとなった。

緒方先生は大変温厚なお人柄で、学生時代から野球を好まれ、自らもピッチャーとして試合に参加されたと伺っており、また春桐と号して俳句にご堪能で、水原秋桜子と俳句の道に励まれたと聞いている。教室の雰囲気もよく、教室の主な研究テーマは血清学、とくに抗原抗体反応(量的比)についてであり、終戦後の研究費の極めて乏しいなかで、研究を比較的自由にさせていただいた事は大変幸せであった。しかし先生は研究に対しては非常に厳しく、いちいち細かくは指示されないが、与えられたテーマについて一定の成績を出して先生のご指導を受けない限り、なかなか次に進むお許しが出ず苦心した。

当初、緒方正名君と共同で血清学(免疫学)の研究を、当時全国で始めて衛生学教室に設置されたチゼリウス電気泳動装置を用いて行っていた。新しい機器だけにしばしば徹夜の実験となったが、苦しいながらも色々新しい知見が得られて楽しい思い出である。

また教室では疲労の研究も行われ、緒方先生の指導でサッカーなどの運動時や紡績工場女子従業員の疲労調査を行うと共に、疲労の指標として尿中に排泄される尿淡白やその他の疲労物質を、濾紙電気泳動法や緒方先生が開発された免疫反応による尿微量蛋白測定法などにより解明を行った。

昭和32年3月緒方先生が定年で退官されるまで永年にわたって、公私共に大変お世話になり、私を衛生学の分野に導いてくださった恩師として深く尊敬し、感謝している。

大平昌彦先生：

大平昌彦先生は昭和32年6月、緒方益雄先生

の後任として、九州大学医学部衛生学助教授より、2代目衛生学教授に就任された。大平先生は1954年に米国ピッツバーグ大学の公衆衛生学部留学され、Master of Public Healthの学位を取得された新進気鋭の教授であった。従来のが国におけるドイツ系医学の実験衛生学から、戦後はアメリカ系の公衆衛生学が導入されてきたが、大平先生からは米国留学による衛生学、公衆衛生学についての幅広く、新しい見識をもってご指導頂いた。その中で、先生が留学中に特に関心を持たれていた環境衛生学、産業衛生学領域での電離放射線の影響とその防御についてお教えを受け、この分野についての目を開かせて頂き、その後の私の研究に大きな指針を与えて頂いた恩師であり、また先生は敬虔なクリスチャンであり、温和で親切なお人柄から、公私共に大変お世話になった。

その後、大平先生の心強いお励ましと熱心なご推薦により、幸いにも昭和36年(1961年)に米国チャイナメディカルボードの奨学生として、ニューヨーク大学産業医学研究所(後に環境医学研究所)のアイゼンバッド教授のもとで、環境放射能について研究する機会が与えられた。

メリル アイゼンバッド先生(Dr. Merril Eisenbud) :

アイゼンバッド先生は1915年にニューヨーク市で誕生になり、ニューヨーク大学を卒業、工学博士の学位を得られ、その後生涯を科学者、技術者として環境衛生の研究に尽され、また行政にも関係された。1947年から1957年まで米国原子力委員会(AEC)ニューヨーク衛生安全研究所の初代所長、ついで1957年から1959年まで米国北東部AEC運営委員長を勤められた。米国原子力安全の第一人者であり、その後1959年からニューヨーク大学産業医学教授として同大学産業医学研究所環境放射線研究室主任を勤められていた。先生は電気工学ご出身にも関わらず、関連する医学、生理学分野にも精通しておられ、的確な指導をうけた。

私は1961年から2年間、アイゼンバッド先生のご指導のもとに環境放射能の研究に従事した

が、当時アメリカとソビエトとの間で熾烈な核兵器の開発競争が行われており、そのために大気中核実験が頻繁に行われていた。私に与えられた主な研究課題は、これらの核実験の際に生ずる大量のフォールアウト(放射性降下物)中に含まれる放射性ヨウ素( $^{131}\text{I}$ )によって、ニューヨーク住民の甲状腺の被爆線量がどの程度であるか、また主な被爆経路は何かを推定することであった。

まず先生の指示は、大学構内にあったニューヨーク市医務監察院で多数行われる法医学解剖の際に、毎日甲状腺を採集し研究室の放射能測定器で $^{131}\text{I}$ を測定することであった。ソビエトの核テストが行われていた2年間に、胎児から成人まで約730の甲状腺中の $^{131}\text{I}$ を測定し、胎児から乳児、小児、成人など階層別の被爆量を推定すると共に、他のスタッフと共に、市販の牛乳、野菜など日常の食品、空気中の放射能を測定し分析して、経口、経気道など主要な被爆経路を推定することに没頭した。それらの成績は幸いにもScience誌等に数編の論文が発表できた。これもアイゼンバッド先生の懇篤で的確なご指導の賜物である。またこれらの環境放射線の研究を進める中で、当時日本ではまだ余り知られていなかった、人間と環境との関りあいを研究する人間生態学(human ecology)の概念をも教えていただいた恩師であり、このことは私のその後の研究にとって大変貴重なことであった。なお先生は環境放射能に関する業績や考えを纏めて、著書「Environmental Radioactivity」を出版されたが、私が留学を終えて帰国する時、先生はその本の裏表紙に「君との親密な2年間の環境放射能の研究を楽しんだ。環境放射能がよりよい世界を築くための原子力の平和利用からだけであって欲しい。」と書かれた。私の大切な記念である。

このようにアイゼンバッド先生のもとでの留学は、私の長い研究生活のなかで最も研究に集中できた時期であり、誠に幸せな経験をさせて頂いた。先生は先年お亡くなりになったが、今でも先生の温容と共に、研究に対する厳しい姿



勢、頂いた懇切なご指導を思い出し、感謝に耐えない。

岡山大学衛生学教室に復帰した後、大平先生のご尽力と、ニューヨーク大学留学中にアイゼンバッド先生の紹介で、たまたま国連科学委員会日本代表として来られていた当時科学技術庁放射線医学総合研究所（放医研）所長の塚本憲甫先生にお会いし、<sup>131</sup>Iによる甲状腺被爆の研究など当時行っていた研究についてご説明したことも一つの縁となり、昭和40年5月同研究所に転出した。障害臨床研究部、その後臨床研究部において、放射線防護、特に今までの放射性ヨウ素（<sup>131</sup>I）による甲状腺被爆の研究を発展させて、その化学的防御法による被爆軽減の研究をおこなった。

昭和45年、戦後わが国ではじめて認可された私立医科大学の一つとして、川崎医科大学が新しい医学教育を目指して前理事長川崎祐宣先生によって設立され、大平先生のご推挙もあって、昭和47年4月川崎医科大学衛生学教授として着任した。

川崎医科大学衛生学教室では、重金属、有機物質など各種環境汚染物質の生体影響を免疫系、内分泌系、血液酵素系等を用いて、一連の研究をおこなった。

このように私の今までの研究人生は、多くの人々の支え、特に恩師緒方益雄先生、大平昌彦先生、そしてアイゼンバッド先生によって導かれ、これが川崎医科大学での研究につながった。終わりに：

その後研究生生活を離れ、川崎医科大学、川崎医療短期大学学長を経て、平成16年3月川崎医療短期大学顧問を辞するまで35年もの長い間、川崎学園に勤務させて頂いた。これは私が岡山医科大学衛生学教室に助手として勤務を始めてからの期間54年の実に65%になり、この川崎学園で極めて充実した時期を過ごさせていただいたことは誠に幸せであり、前理事長故川崎祐宣先生、理事長川崎明德先生に深く感謝している。